

ていると、私には、かつての自分の防空壕体験と重なる風景が見えてくる気がした。それは不思議であると同時に、ここにこそ希望に繋がる何かがきつとあるという予感を感じさせてくれるものだ。

その一つは深刻な状況にありながら、子どもたちは基本的に無邪気であることだ。それは子どもたちが事態を理解していなかったり、生活の責任や苦勞を負っていないからではなく、彼らが生きていくことをあくまでも前向きに捉え、遊びや笑いを生活の基調としているためだろう。

別の言い方をするなら、子どもたちは生きることをとことん肯定している。その姿を見たとき、オトナたちはほっとして心の救いを得ることができる。それゆえ子どもが子どもらしくいることは、子ども自身にとって大切なばかりでなく、社会にとって重要不可欠な条件なのである。無邪気な子どもたちがいなければ、私たちは生きてはいけない。

見えてくる学校教育の課題

一方、避難所の中学生からこんな話を聞いた。「うちの先生、あんなにきばき動いて、やさしくみんなに話しかけてる。先生ってほんとは思いやりがあるし、心からやさしい人なんだ！見直した」と。

おそらくこの子は学校では先生の一部の顔しか見ていなかった、あるいは見えていなか

ったのだろう。この生徒は避難所での生活で、先生の内面にある人間性を冷静に観察することができたのだ。でも、それならばどうして、これまでの学校現場では身近に心が通じ合う「人間」が見えていなかったのか。私は意地の悪いシニカルな見方に陥っているのだろうか、そうではあるまい。ここにこそ今日の教育の大問題の端緒が見えている気がする。

また別の避難所で、てきばきと被災者のお世話役をしていた中学生や高校生に現在の心境を尋ねてみたところ、「自分は幸せだと実感した」「自分が皆さんのお役に立てることがうれしい」「自分たちはこれまで甘えてた」「もっと勉強も頑張らなくっちゃ」などという答えがすかさず返ってきた。ここにはしっかりと自分の足元に目を向け、しかもその自分をてらいなく表現する彼ら彼女たちの姿がある。だが、果たして普段の生活や学校の中で、彼らはそのような認識を持ち、また言い切ることができたであろうか。そう考えたとき教育の原点は、今一度厳しく問い直される必要がある。

心豊かなチベットの遊牧民

編集部より、この原稿には「緊急寄稿」というクレジットが付せられると聞いたが、ここまで私の予定とはまったくかけ離れた内容になっている。編集者からの当初の依頼は、幼児の造形教育の現場を知る者として、また、

